

# 第一次世界大戦期の跡見女学校

笹島雅彦

第一次世界大戦（1914年7月～18年11月）から百周年を迎えた近年、2014年から18年にかけて、欧州を中心に様々な記念式典が催され、歴史を振り返る関連図書の発行が相次いだ。日本もその例外ではない。開戦当時、日本では第二次大隈重信内閣（1914年4月～1916年10月）が発足したばかりだった。当時の欧州列強は、三国同盟（ドイツ、オーストリア＝ハンガリー、イタリア）と三国協商（英国、フランス、ロシア）の対立状況が深まっていた。

三国協商の一員であった英国から、日英同盟に基づき、限定的な参戦を打診された大隈首相は、中国大陸などでの権益確保を念頭に、1914年8月23日、対独宣戦布告を行った。この宣戦布告は当時、慣例を無視して御前会議を開くことなく、大隈首相の独断で行われた。元老院や議会の承認、軍部との折衝もないままだった。このため、その後の政府と軍部の関係悪化につながっている。

この第一次世界大戦によって、ドイツ、オーストリア＝ハンガリー、ロシアという欧州における三つの帝国が滅んだ。この戦争まで、世界の勢力均衡の中心は欧州にあった。しかし、大戦後は、欧州に加えて、米国と日本が国際政治の主要なプレイヤーとして登場した。戦勝国となった米国は民主主義を世界に広めようと試み、日本は人種差別撤廃やアジア主義のイデオロギーを主張し始めた。また、新たに誕生したソ連は、共産主義イデオロギーを掲げて、20世紀の70年余り、悲惨な実験国家として台頭する。

どうしてこのようなことが起こったのか。19世紀における平和を担保してきた「ヨーロッパの協調」はなぜ、終焉を迎えてしまったのか。大戦から百年後の今日においても、歴史家や国際政治学者が様々な要因を探っている。

こうした問題意識の下、資料収集を進めるうち、当時の新聞記事の中に跡見女学校を取り上げた連載記事を見つけた。本稿は、歴史の断片に過ぎないものの、この記事を紹介することで、大正時代の女子教育をめぐる空気を伝えたいと考えたものである。

## 1. 連載記事の誕生

この連載記事は、大正時代初期、「読売新聞」に初登場した女性のページ「よみうり婦人付録」（写真1を参照）に掲載されたものである。「女学校印象記」と題し、1914年（大正3年）6月6日から7月12日までの1か月余り、31回にわたり、東

(53) 婦女附録

### より婦人附録

新証書亦校

△前野子氏



新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

  

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

  

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

  



△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

  

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

  

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

  

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

  

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

  

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

  

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

  

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

写真1

心感獲のはそ如無のらをく 既無ぞち油あて取んでつ

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

  

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

  

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

  

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

  

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

△前野子氏

△新証書亦校

写真2

京の女学校 31 校を紹介したものである。「私立跡見女学校」(写真 2 を参照) は 7 回目 (6 月 13 日付) に登場した。当時の新聞記事は、同新聞の総合データベース「ヨミダス歴史館」から再録した。

明治時代の同紙は、文芸重視の紙面づくりが特徴だった。文学史に残る小説を次々と連載し、外国文学の紹介にも熱心に取り組んだ。坪内逍遙が文学主筆に就任し、尾崎紅葉、幸田露伴も入社した。大正時代に入ると、新聞界初の女性のページを創設し、毎日 1 ページを使って、時評、流行記事、婦人消息などを盛り込んだ。これは、仏フィガロ紙の婦人欄を参考にしたものである。歌人の与謝野晶子、小説家の田村俊子も入社し、編集を支えた。

連載記事「女学校印象記」は、第 1 回「東京女学館」に始まり、「東京高等女学校」(現・東京女子学園中・高校)、「東京女子高等師範学校付属高等女学校」(現・お茶の水女子大学附属中・高校)、「実践女学校」(現・実践女子大学) など、現代の女子中・高校、女子大学に連なる学校が網羅されている。このうち、「跡見女学校」については、次のような記事として紹介されている。以下、全文を紹介する。

玄関はドアで閉ぢられてある。学校としては珍しい事と思ひながら、開けて正面の緑色のリノリウム滑らかに敷き詰めた広い廊下の突き当りを見ると、コンクリートで固めた狭い運動場に紺飛白揃 (こんがすりそろひ) の生徒三十名許 (ばかり)、体操の用意をして居た。廊下の彼方此方 (かなたこなた) には遊びがてらといった様な卒業生らしい令嬢の姿がちらほら見える。生徒は中流以上の保守的家庭の令嬢か、又は母親か姉が家蹊先生の薫陶を受けた縁に繋がって来るのが多い。

そしてお師匠様お師匠様と、なつきよる之等の六百余の生徒達を孫を見る様なやさしさと楽しみを以って教育して居られる。斯様な内幕を持った上に、又花蹊先生の御考えもあり、かたがた文部省の高等女学校の規定には少なからぬ困難を感じるので、未だに高等女学校の認可を受けずに居る。家庭でもそれをよくのみ込んで子女を託すのである。校長が画家でいらっしゃる故か、生徒は何れも此の道に長けて、応接間の壁などは生徒の寄書の花鳥で美しく飾られてあつた。

此校からは、女優森律子が出ている。その事に話に移ると、係員は「全く此校の卒業生としては、毛色の違つた方に出たものです。然し、彼の人が出たからといって別段に生徒の思想に動揺を及ぼしたような事は少しもありません」と語られた。

(原文は、当時の漢字かな混じり文で、句読点のない続き書きである。漢字には振り仮名が振ってある。このため、句読点などを一部修正した。)

## 2. 記事の背景

当時の「私立跡見女学校」は、どのような性格の学校だったのか。

泉雅博・植田恭代・大塚博著「跡見花蹊 女子教育の先駆者」(ミネルヴァ書房)

によると、この新聞記事連載当時の跡見花蹊は75歳。大塚博教授による同書の「はじめに」では、「大正15（1926）年1月10日に87歳で亡くなるまで、日本の女子教育の先駆者として、女子教育の充実と発展に生涯をかけて尽くした」と評価している。「花蹊の女子教育は、教養と芸術（書画）を重んじながら、授業ばかりでなく生活そのものを通して、女性としての立ち振る舞いや己を侍した心のあり方を身につけさせようとするものであった」という。書画を重んじた教育というのは、記事の中にも紹介されている。ただ、6月13日前後の「跡見花蹊日記」（第4巻）を調べたところ、読売新聞の紹介記事について触れている部分は見当たらない。

また、女子教育が制度化されていく中で、跡見花蹊は政府が規定する高等女学校令とは一線を画し、独自の教育路線を取っていたことで有名だったことが記事からもうかがえる。1891年（明治24年）、尋常中学校の一種として女学校が認められてから、女子教育に関する規則が相次いで定められていった。1899年（明治32年）に高等女学校令が出され、女子教育が制度化されていく。こうした流れに抗して、独自のカリキュラムに基づく教育に取り組んでいた。

第一次世界大戦勃発前年の1913年（大正2年）11月に「財団法人跡見女学校」が認可となる。また、修業4年の高等女学校卒業者と同等の学力を有する者と認めるよう文部大臣に願い出て、1918年（大正7年）に認可された。実質的に上級学校への進学に支障が出ないよう配慮されたものだという。跡見女学校が高等女学校となるのは、第二次世界大戦中の1944年（昭和19年）だから、かなり頑強に独自路線を守っていたといえるだろう。

跡見花蹊は、第一次世界大戦参戦当時の首相だった大隈重信とは、長く親交を保っていたようだ。同書第4章によると、跡見花蹊は、1909年（明治42年）、古希を迎えた。同年5月、花蹊の古希と跡見女学校創立35周年を記念して祝賀会が開かれた。大隈重信はこの席で演説を行い、「女子に必要な優美の気象を、其独特の美術の手腕によって学生に備へられたと思ふ」などと、花蹊の教育を称えている。1912年（明治45年）7月に、花蹊は政府から勲六等宝冠章を授与された。

記事の最後に、女学校OGとして、女優の森律子（1890-1961年）が紹介されている。父の森肇は弁護士、衆院議員を務めていた。跡見女学校卒業後、森律子は帝劇女優第1期生となり、お嬢様女優として話題を集めた。喜劇を得意としたという。

しかし、当時の世相では、芸人は卑しい職業と見なされていたようだ。記事には、学校職員が「毛色の違った方」と非難めいた評価をしたエピソードが紹介されている。森律子は女優となったことで、当時、跡見女学校の同窓会から除名となったようだ。とはいえ、現在の学校法人跡見学園ホームページには、森律子は「著名な卒業生」として記載されている。時代の変遷を示すものだろう。

また、「跡見開学百年」（跡見学園百年史編集委員会）の年表によると、大正3年（1914）の記録として、「10・26 慰問袋750個を中国山東および南洋方面に活動の陸・海軍出征軍人に送る」「11・11 青島のドイツ軍降伏による東京市祝賀会、授

業1時間で臨時休校」と、戦時中を思わせる記載がある。

大正7年(1918)の記録としては、「11・21 欧州大戦休戦祝賀、生徒に茶菓を配布」との記載がある。第一次世界大戦の学校への影響はそれなりにあったようである。

### 3. 当時の女学校風景

他の女学校はどのように紹介されているのだろうか。

「東京女学館」(第1回連載)については、「一様に濃い海老茶の袴を胸高にはき、歩くたびにシュッシュッと衣擦れの音をさせる」と生徒たちの様子を活写している。「此の校は、徳川、毛利の華族をはじめ、三井、岩崎など貴族、富豪約二百名の会員から成る女子教育奨励会の設立したもので、現館長は伯爵である」と紹介している。

下田歌子が創立した「実践女学校」(第4回連載)については、質素勤勉を旨とし、「廊下を行き交う生徒達はいちいちお辞儀をして通る。生徒はほとんど草履を用いているせいか、廊下の奇麗なことは鏡のよう。掃除はすべて生徒がするのであるさうな」と校内の様子を表現している。

「聖心女学院」(第19回連載)については、授業参観を断られたうえ、「四円五拾銭の授業料や校庭の彼方此方の主待ち顔の馬車や車の具合から、上流殊に外交官の子女が多いということだけはすぐに知った」というエピソードがつけられている。

「よみうり婦人付録」に掲載された記事を見ると、「婦人と職業」などと題する記事があり、第一次護憲運動の華やかなころ、女性の活躍推進は一つの社会的テーマだったようだ。

例えば、「婦人と時勢」(1914年6月10日付)と題する論評記事は、女性が積極的な生活を試みるよう、鼓舞している。

「今日の時勢は、ある程度まで婦人が自由にその才能を伸ばすに不都合のないようになりつつある。婦人が、多年の消極的生活から脱出しきって、徐々に積極的生活に移りゆく、その試みの舞台として、職業に従事することは一番適当なことであろう。また、職業——殊に複雑なる職業に成功しうるほどの婦人でなくては、主婦としても、母としても、これからの家庭生活を、完全に経営してゆくことは不可能だということ言える」

こうした記事を見ると、百年前の当時も現代も、女性の社会進出が大きなテーマとなっていることに変わりないことがわかる。断片的な記事の数々ではあるが、当時の世相を反映した女子教育の一端をうかがい知ることができる。